

## 『赤と黒』のレアリスムとロマネスク

白田 紘

## はじめに

スタンダールの『赤と黒』（二八三二）はいわゆる「古典」なのだろう。確かに、日本ではしばらく前の時代、「世界文学全集」と称する翻訳文学のシリーズのなかに、この作品は必ずと言っていいほど収められ、それも時にはドストエフスキーの『罪と罰』と第一回の配本を競っていたように記憶する。「古典」と言うとき、こうした全集に入り、揃いの美しい背を見せて書棚に陳列され、読まれずに所蔵されている過去の文学のように思われているところがある。フランスでも、プレイヤード版と称するガリマール書店のシリーズに収められたりすると、「古典」と見なされるようで、事情は変らない。『赤と黒』は、一九三二年に発刊されたこの叢書のなかでは、そのデビューを飾った一巻として、アンリ・マルチノの編集により、『アルマンズ』を併載して出版された（第二次大戦後に出た版では『リュシヤン・ルーヴェン』も併載）。

しかし、一般に「古典」は、繰り返し読んで読まれる作品、読むたびに新しい発見のある作品などと定義されている。また時代を経ても読み継がれる作品とも言われている。そうした評価が、いわば賞味期限のないことの保証であるかのように、書棚にしまいこませ、読まないで放置する事態を引き起こしているとも考えられる。美術工芸品のように、ひとつの完成の域に達したものが「古典」と思われているところがあるのかもしれない。しかし、文学においては、読まれずには何かしらの完成に至ることはない。読者の一人ひとりのうちで、はじめて完結する。作品それ自体にしても、あまねく読者の眼から見えて完璧と評価されるようなものはないのではないか。むしろ、繰り返してのレクチュールを可能にするのは、隙間やら綻びやらの欠陥と思われるものとか、何か解らないものがあつて、引きつけられずにはいられないような作品、つねに読者に向かって開かれ、問いを投げかけるような作品と言った方がいいだろう。

そういう点から言うと、『赤と黒』については、さまざまな点で綻びが目につくし、不可解さに満ちている。そしてこれは必ずしも充分に読み解くことはできない。それなら、いつそのこと、この解明できない謎を拾い出し、あれこれと考えることを楽しみにするのによいのではないだろうか。

—

『赤と黒』の作者スタンダール（本名アンリ・ベール、一七八三—一八四二）は、若年から演劇に関心を寄せ、劇作を試みている。かれの時代には文学とは詩であり、また演劇であった。古くから戯曲は劇詩と呼ばれ詩のジャンルに入っていた。フランスでは十九世紀のうちに隆盛を誇るようになる小説は、この世紀の初頭にはまだ文学の範疇に入るものとは見なされていなかった。したがって、文学を志す青年は、詩作を試み、あるいは演劇を目指した。文学史上ではスタンダールと並んでこの時代を代表する小説家バルザックも、はじめは劇作を志し、その習作をアカデミー会員の劇作家・詩人フランソワ・アンドリュエに読んでもらったりした。小説はアルバイトに偽名で書きはじめたのが発端であった。そしてスタンダールになる以前のアンリ・ベールはというと、その文学修行は「新しいモリエール、フランスのシェイクスピア」になるのが目標であった。

ここでは細かく追求する余裕はないが、演劇の修行では、モリエールから出発したベールに二度の大きな刺激があった。イタリアにおけるオペラ（とりわけオペラ・ブッフア）との出会いとロマンティズムの運動との出会いである。ベールの劇作は、時には構想とストーリーならびにプロットの作成に、時には登場人物の造形に終わるが、モリエールの性格喜劇への嗜好から出発して、そこに恋愛のこまやかな交情を混じえた作品の試み、そして歴史に題材を取った作品の試みへと移っていく。とりわけ、文学論『ラシーヌとシェイクスピア』（一八二三、一五）では、同時代にふさわしい作品がロマン主義文学と呼ばれるものであり、古典作家を模倣することは時代にそぐわず、古典主義であると主張している。つまり演劇における韻文や独特の表現、そして三統一の規則といったものが現実を描くことからかけ離れていること、また筋の展開が同時代の観客に納得のできるようなものでなければならぬことを指摘している。かれは「自然さ」le naturelを、古典主義文学が唱えたのとは異なった側面から唱えている。そうした経緯のあとで、ベールは小説に手を染めることになる。かれの関心は同時代をいかにしてトータルに描くかであり、これを、演劇の習作で鍛えたストーリーの展開の仕方や、演劇では排除しなければならなかった直接的な説明など、すべてを用いて描き出すことのできる形式として、小説にたどり着いたのである。

ベールは『赤と黒』以前の二七七年に最初の小説『アルマン

ス」を書いているが、そこでは王政復古期のエネルギーを喪失した真摯な貴族青年の恋愛を描いている。この青年オクターヴには、まさにかれの生きる時代が見事に刻印されている。この小説は「一八二七年におけるパリのあるサロンの情景」という副題が付けられているが、サロンからこの時代の社会が展望できる奥行きをもっている。現代の読者には、この時代についての一応の知識がないと解らないところがあるのが難点だが、同時代の読者にもはたしてベールの慧眼が見抜けたかどうか。この小説の「鍵」となっている主人公の不能が、プロスペール・メリメへの手紙のなかで作者によって明かされているが、オクターヴのエネルギー喪失を考えれば、これもなるほど納得できる。

さて肝心の『赤と黒』だが、初版表紙に記されたこの本の副題は「十九世紀年代記」である。一八三〇年の十一月、刊行にわずかながら先んじて『ガゼット・リテレル』誌第四八号にその一部分が掲載された。こちらは副題が「一八三〇年代記」となっている。現在では、いくつかの版が後者の副題を採用している。というのは、この小説が十九世紀のなかでもまさに王政復古時代末期のこの年代に根を下ろしている作品だからである。

実際『赤と黒』は日付をもった小説である。第一章において、舞台となるヴェリエールの町でレナル氏が一八一五年以来町長に就いていることが示され、王政復古期の物語であることは最初に読者に伝えられる。そして小説では、主人公ジュリヤン・ソレ

ルの十九歳から二十三歳までの五年間が描かれるが、それは一八二六年から三一年までに該当することが作品を通じて読み取れる。アンリ・マルチノはかれの編集したガルニエ版『赤と黒』の付録のなかで、小説中の出来事を年表に仕立て、発端のジュリヤンが家庭教師としてレナル氏の家に入るのを一八二六年九月二十五日とし、最後にかれが処刑されるのを一八三一年七月二十五日と特定している。これを歴史と照らし合わせて見ると、一八一四年にナポレオンが皇帝を退位して、フランスでは一七九二年に共和制が宣言されてから二十二年ぶりに王政が復活するわけだが、一八二四年にはルイ十八世のあとを継いだ王弟アルトワ伯がシャルル十世として即位し、反動的な政治を行なった時期であることが分かる。王政復古したものの、革命前の旧制度の時代ほど権力も財力ももてない貴族階級のアセリと、もはや身分の殻に閉じこもっていることに飽き足りず野心満々の庶民階級のあいだに、軋轢は日増しに膨らんでいった。そして一八三〇年に再び革命が勃発する。七月革命である。『赤と黒』の社会的背景はざっとこのような状況であった。つまり、革命の予兆のなかで物語は進行するわけだが、小説中では革命は起こっていない。ベールは一八三〇年の五月から校正に着手していたものの、かれの習慣で訂正と加筆に時間をかけている間、七月には革命が起こり、一八三一年はじめに本が出たときには、小説は現実に追い抜かれてしまっていた。『赤と黒』は、こうした時代に裏打ちされているが、もちろんそ

うした知識がなくても、いつの時代にも共通する野心にあふれた青年の人間像を描いた作品、人間の心の動きを追及し分析した作品として読むことが可能である。しかし、人間の心の動きに、ある普遍性を見るにしても、その心の動きですら、生きている境遇（時代、社会、政治など）によって左右されるものである。解説を進めるためには、その背景を見極めておく必要性がある。

まず、この作品は製材所の三男である主人公ジュリアンの野心の物語であるが、野心に取り付かれるのも上で記したように時代精神なのである。革命前であれば、身分を越えた立身出世を望むことは、現実にはほとんど不可能なことであつた。才能はあつても無一物の青年が出世を考えるのは、革命時代とナポレオンの時代を経験するなかで生まれてきたことであつた。ジュリアンばかりでなく、バルザックのラスティニヤック然りである。そうした状況は何としても後戻りができない。この「後戻りできない」とが、逆に貴族階級のなかには、エネルギーの喪失あるいはもどかしさとなつて一種の閉塞状態を生み出すのである。ヒロイックな登場人物であるラ・モール侯爵令嬢マチルドが、彼女を取り巻く青年貴族を見限つて、平民のジュリアンに引かれていくのも、このエネルギーゆえにである。青年貴族たちはアンニユイのなかで、ただ革命だけを恐れている。

この小説における時代の刻印はこればかりではない。革命後フランスにおいて急速に伸びてきた産業資本家たちや、ナポレオン

が教皇ピウス七世と締結した宗教協約（コンコルダ）以来勢力を伸ばしてきたイエズス会の司祭たちの動静が、野心家の青年の運命を左右する。かれらの合言葉は「利益」であり、これが野心家から転落した青年を抹殺することにもつながる。

レナール夫人を狙撃して裁判にかけられたジュリアンは、公判の最後の弁論で、計画的犯行を認め自ら死刑を求め一方で、自分を裁く人たちが自分と同じ階級に属さないゆえに自分に厳罰が下るだろうと述べて、いわば富裕階級を告発し、結局かれらの怒りが陪審員の評決となつて死刑という結果をもたらす。レナール夫人は負傷しただけであるのに、この判決は厳しすぎるように思われるが、これも、ジュリアンが夫人を教会でミサの最中に狙撃したことを考えれば、イエズス会の伸張とともに一八二五年に復活した流聖罪法を暗黙のうちに適用してかれに極刑が言い渡されたと理解してよいだろう。この小説のモデルとなつたベルテ事件において、一八二七年に教会でミシユー夫人を狙撃して怪我を負わせたアントワーヌ・ベルテは、小説の主人公と同じく、死刑判決が宣告され、二八年二月グルノーブルのグルネット広場で処刑された。ただ、流聖罪法は一八三〇年の革命により廃止されたので、ここでも現実が小説に先んじてしまったと言えるだろう。

ところでこの小説の第二部第二十一章から二十四章にかけて、奇妙な挿話が入っている。秘書に雇つたジュリアンの優れた暗記力を知つたら・モール侯爵が、かれにある貴族のサロンで行なわ

れる討論を書き取らせ、それを縮めたものを暗記させたいえ、どこかメッスの先の東の町に派遣し、その地でかれはある公爵に会って、その暗記してきた内容を聞かせる、というものである。何やら政治的陰謀の匂いは感じられるものの、これが正確には何であるのかはつきりしない。ただ、作者が介入して、「想像力の樂しみのなかでの政治は、音楽会の最中のピストルの発砲」ということが言われる。この箇所については、一八一八年に起こった目的も経緯も異なつたある事件がヒントになつたらしいことが指摘され、また現在ではシャルル十世治下でジャーナリズムを賑わした密書事件を利用して、この挿話に仕立てたという説が有力である。挿話の網の目を解きほぐしていくと、ラ・モール侯爵をはじめとする過激王党派が国内の革命の機運を察知して、一旦急の時にはこれを阻止するために外国の干渉を要請すべく、ジュリヤンを密使に立てたということになる。この挿話は、ジュリヤンとマチルドの自尊心の闘いが二人の気持ちに大きな溝を生じたあとでやってくるために、何か唐突な感じがあり、しかも意味が判然としないが、ここで作者は出版書肆の言として、政治が出てこない」と「本はもう鏡ではなくなる」と言わせている。つまり、ペールはこれが時代をきちんと反映した挿話であることを保証している。

ペールは第一部第十三章のエピグラフで、有名な「小説は道に沿って持ち歩く鏡である」という文句を書いているが、小説は時代を映すものであるというのが、かれのリアリズムであり、『赤と

黒』の解説は、まずその観点で行うのが第一歩になるだろう。

## 二

しかし、すべてが時代背景から説明できるものではない。『赤と黒』にははじめに述べたように、解説に戸惑うような部分が多々ある。

その最大のもは、第二部第三十五章の「あらし」と題された章におけるジュリヤンのレナール夫人狙撃事件である。ラ・モール侯爵令嬢マチルドとの自尊心の闘いに勝利したジュリヤンは、マチルドから妊娠を告げられる。父親の侯爵はそれを知ると怒りに我を忘れるが、ピラール神父のとりなしで、娘とジュリヤンの結婚を認めるところにまでいく。ところがそこに侯爵宛のレナール夫人の手紙が届く。文面からすると、侯爵がどうやら娘の婿となる青年の行状をレナール夫人に問い合わせたらしいのだ。でも今さらなぜなのだろう。自分の知らぬ間に、どんな手を使ってか娘を籠絡した憎むべき男、神父の仲介でやむなく結婚を認めることにした男の行状を問い合わせるなんて！それも、不可解なこと、ジュリヤンがそれを侯爵に示唆したらしいのだ。そしてその手紙は何という内容。「貧しく貪欲なこの男は、このうえなく巧妙な偽善の助けを借り、弱い不しあわせな一人の女を誘惑して、地位を手に入れ、何ものかになろうとした」と書いている。これ

があとで明かされるように、告解の司祭の言うままにレナール夫人が書いたにしても、本人以外の誰がジュリヤンの目論見の真相を知るだろうか。そして、マチルドから渡されたこの手紙を読んだジュリヤンは、馬車に乗るとヴェリエールの町まで一直線に走らせ、到着するや銃砲店でピストルを買い求め（日曜日だが、店は開いていたのだろう）、教会に赴き、ミサに出席している夫人を狙撃する。それでも、かれにはためらいがある。「身体がいうことをきかない」のだが、夫人の顔が隠れてはじめて引き金を引くことができる。

ジュリヤンはなぜレナール夫人を狙撃しなければならないのか、読者には解らない。パリからフランシユ・コンテ地方のヴェリエール（架空の町だがモデルがある）までは優に三百キロはある。冷静な主人公がこの犯罪を激情に駆られて実行するには時間があきすぎる。この狙撃に関しては、研究者はさまざまな仮説を立てているが、ほとんどが作者の創作上の問題に還元している。しかし、なかには、マチルド（というよりむしろラ・モール侯爵家）を征服したジュリヤンは、それが社会的な敗北と分かっていたにもかかわらず、自分の内なる勝利をさらに確実にするために、「義務」として富裕階級に一矢を報いるべくレナール夫人を狙撃したのだという説も存在する。この部分では想像は自在に飛翔し、自らの野心を打ち砕くレナール夫人への二発は、侯爵に示唆して夫人に問い合わせをさせたのと同じく、今やマチルドと結婚せざる

をえなくなったジュリヤンのゆがんだ夫人への思いともとれないだろうか。

謎といえ、この小説のタイトル『赤と黒』についても、どのような意味か判然としない。作者はこれについては何も決定的なことは言っていない。主人公のジュリヤンは、ナポレオンの時代には軍人となって手柄を立てれば一躍伯爵に取り立てられるが、王政復古の時代には僧侶となる以外には出世の道はないと考えている。それで「赤」は軍服を、「黒」は僧衣を指すという説があった。しかし、当時のフランス軍の制服は青い色であるという実証と、かれの目指す高位聖職者は黒い衣を着ないという事実が指摘され、今では着衣の色彩は否定されている。それでも、象徴的に軍人の身分と聖職者の身分と考える説は消すことができない。ほかに、「赤と黒」は高位聖職者と下級僧侶とか、共和制と復古王政、もしくはジュリヤンの共和主義とかれを取り囲む聖職者の世界などと諸説がある。また賭けのゲーム板で赤と黒から成るものがあるようで、ジュリヤンの生き様をそれになぞらえる説もある。「赤」を情熱、「黒」を偽善と考える説もあつたように記憶する。とにかく、作者は何も言っていないので、作品を読みながら、読者はさまざまに想像できるのである。

繰り返しになるが、『赤と黒』は、貧しいながらも頭がよく才能のある青年が、野心にとりつかれ立身出世をはかる物語であるが、かれの行動を追って読んでいくと、子供のように純粹であつたり、

喜劇的であったり、さまざまな姿が現われる。しかし、多少タルチュフを気取つても、この主人公には作者が随所で主張するような偽善的なところは少しもない。かれは周囲からその真摯で高貴な人柄が認められ、また学問的な優秀さが認められて出世していくわけで、策を弄して地位を手に入れるわけではない。確かに、レナール夫人を誘惑するジュリヤンはドン・ジュアンを気取っているが、かれはこの恋に夢中になってしまふのである。女を利用して出世をはかるどころではない。侯爵令嬢マチルドとの関係についても、今度は彼女の方がかれに引かれて、梯子を使って窓から部屋に入つて逢いにくるよう誘いをかける。ただ、こうした場合いつもジュリヤンに生じるのが「義務」le devoirの観念である。レナール夫人の手を握らなくては、もしくは、毘かもしれないがマチルドの部屋に行かなくては、という気持ちである。身分的な違いがかれにこれほどの無理を強いているのだろうか。このあたりも解釈の余地があるかもしれない。しかしながら、レナール夫人狙撃のあと牢獄に入れられたジュリヤンは、そうした「義務」の観念から解放され平安を感じる。レナール夫人とのヴェルジーの別荘で過ごした時間を真にしあわせに思うことができる。つまり、かれは自分とは異なつた階級のなかで非常な緊張感をもつて生きてきたことが分かるのである。

家庭教師として住み込むためにレナール家をはじめ訪れたジュリヤンは、思い切つて呼鈴に手を伸ばすこともできず、半べそ

状態になる。また、ブザンソンの神学校では、校長のピラール神父の前に出ると、緊張のあまり気を失つてしまふ。そのくらい初心なのに、かれは大胆である。レナール夫人との仲が噂になり、ヴェリエールを去らねばならなくなるが、危険を顧みず、夫人のもとへ忍んでくる。また、ラ・モール邸に秘書となつて住み込むと、夫人に逢うためにすぐさまヴェリエールまで戻り、梯子を使って彼女の部屋に忍び込む。パリにおいては、ヒロイックな感情で使用人ジュリヤンを恋人にした侯爵令嬢と、侯爵令嬢を恋人にしたものの軽蔑されたくないと思えるジュリヤンとのあいだで、自尊心の闘いが熾烈に展開されるが、かれは最後にマチルドの気持ちを引き付けておくために、お堅いフェルヴァック元帥夫人に恋の戯れを仕掛ける。これはコラゾフ公爵から授かつた知恵によるもので、公爵からは滑稽にも順次送るべき五十三通のラブレターを譲り受ける。このようにジュリヤンは一旦踏み込んだ恋愛においては積極的であり行動的である。しかし、身分の違いはかれの意識から離れることはない。

ジュリヤンとは何者なのだろうか。製材所の末っ子でありながら、頭がよく勉強家でシエラン神父から神学の教えを受け、しかも高貴な精神をもつていて俗なところがない。父親のソレルは、計算高く俗な人物で、息子が本ばかり読んでいることをむしろ憎んでいる。トビがタカを生んだような親子なのだ。ところが第二部第七章で、神経痛で外出できないラ・モール侯爵がジュリヤン

を話し相手とするのに際して、青い服を与えて友人の貴族の息子として遇する場面がある。そのあとではロンドンに派遣し、そこから帰ってくるジュリヤンに勲章が下りている。この好意はどういうことなのか。また、この章で侯爵がピラル神父に洩らす「わたしはジュリヤンの出生を知っている」という一言の意味は、どうなのだろうか。まるで、この立身出世をはかる平民の青年が、実は貴族の落胤であるかのようなニュアンスなのである。このニュアンスは、マチルドがジュリヤンと結婚する決意を固めると、ラ・モール侯爵は「身分不相応な縁組」が世間で噂にならないように、ジュリヤンを貴族に仕立てる工作をして、別に生みの親がいるような形を取るところでも感じられる。このようなニュアンスとは異なるが、ジュリヤンの幼少時に、世間にはソレルの従兄弟という触れ込みで、かれの家に元ナポレオン軍の軍医正が居候をしていたという事実が、第一部第三章に記されている。この軍医正はジュリヤンに教育を授け、死に際しては自分がもらったレジョン・ドヌール勲章や、休職年金の未受領分、書籍をかれのために残している。この人物は皇帝になる前のボナパルトに心酔して、のちには自由主義者であったというから、ジュリヤンのいわば精神的な父と言えるだろう。しかし、いずれにしても、この人物の正体、そしてジュリヤンとの関係は明らかではない。こうした曖昧な父親に対して、母親は不在である。その消息は一切記されていない。

『赤と黒』のなかでは、こうした謎のようなもの、解らないものに、想像力は刺激されるが、それがまたこの小説を読む醍醐味と言っていいだろう。小説ならでの偶然性や、不合理性は、度を過ぎすと想像力を萎ませ、嫌悪以外の何ものでもないが、不可解さにしても解釈の余地があつてこそ、それに付き合うことができる。『赤と黒』においては、テキストの外側、ないしテキストの内側にその解説を促す要素が散らばっているゆえに、楽しめるのである。

#### 【テキスト】

*Le Rouge et le Noir*, texte établi et annoté par HENRI MARTINEAU, in *Stendhal Romans et Nouvelles I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1952

*Le Rouge et le Noir*, texte établi avec introduction, bibliographie, chronologie, notes et variantes par HENRI MARTINEAU, Classiques Garnier, 1962

*Le Rouge et le Noir*, texte établi et annoté avec une introduction historique par JULES MARSAN, préface de PAUL BOURGET, Nouvelle édition établie sous la direction de VICTOR DEL LITTO et ERNEST ABRAVANEL, Œuvres complètes de STENDHAL tomes 1-2, Cercle du Bibliophile, 1967